小学校高学年で来日した外国人児童の学級参加の径路
—国際教室のある小学校に転校した事例から—

市川章子（一橋大学大学院生）

要旨

本研究は、出入国管理及び難民認定法の改正以降家庭の都合で来日した外国人児童の学級参加の径路をまとめた論文である。分析は、ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）の提唱する文化心理学に由来する複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）を用いている。複線径路等至性アプローチは、人間の経験を重視する方法論であり時間を捨象せずにプロセスを描きだすことに適している。本研究では複線径路等至性アプローチの概念である EFP、P-EFP、BFP、OPP、SG、SD、SPO で分析し日本の公立小学校で学ぶ外国人児童が学級参加に至るまでに働く力を可視化した。調査は、201X 年日本の公立 H 小学校において約半年間フィールドワークを行った。H 小学校には外国人児童に対する支援者として携わり、支援の際の児童の様子や日本語指導の内容及び担当教員とのやりとりについてメモをとりデータを作成した。結果から、国際教室での学びや担任教師たちの指導に加え、中国語のわかる支援者が学級に参画したことが Z さんの中国語や中日文化の異同の表出につながり、担任教師との相互理解へと導かれた。こうしたプロセスを経て日本の学級に溶け込み主体的な学級参加へと辿りついたといえる。本研究により家族の事情で来日した子どもたちが日本の学校で経験する日常のプロセスの一つを描き出した。

キーワード： 外国人児童、複線径路等至性アプローチ、国際教室

はじめに

筆者は2010年からNPO法人や公立校及び地域日本語教室などで外国人児童生徒や親たちに対する支援や教育・相談に携わってきた 1 人である。外国人児童が日本社会で伸び伸びと成長するために必要な要因について明らかにしたいと考え、日本の公立 H 小学校での支援記録を複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:TEA）にて可視化し、学級参加を促進・阻害する要因について探りたいと考えた。これらを検討することは、外国人児童の本質だけでなく彼ら／彼女らを取り巻く教師や支援関係者および保護者のニーズがどのように存在しているのかを明らかにできると同時に、今後の外国人児童の教育や支援における内容の向上を考える際に活動の資料として役立つものになると考えた。

Ⅰ．問題の所在と研究目的

日本では 1990 年前後の出入国管理及び難民認定法の改正以降多くの外国人が来日するようになった。現在、日本の学校で学ぶ外国の子どもたち[1] は中国や韓国台湾などの東アジア地域やフィリピン、ベトナム、カンボジアなどの東南アジア地域に加え、ブラジルやペルーなどの南米にルーツをもつ人々が多い。文部科学省の初等中等教育局国際教育課は外国人児童生徒に対して「日本語指導が必要な児童生徒」という言葉を用い調査報告をおこなっている。「日本語指導が必要な児童生徒」とは、「1. 日本語で日常会話が十分にできない者及び 2. 日常会話はできても、学年相当の学習言語が不足し、学習活動への参加に支障が生じている者で、日本語指導が必要な者」（文部科学省, 2010）を指し本研究の対象者である外国人児童はこれらに分類される。木村は、外国籍の子どもの教育に関する問題は「国民を育てる」ことを前提としていた「日本の学校」の根幹にかかわる問題であると指摘し､現行の制度では日本にいる外国籍の子どもが教育を受ける権利は保障されておらず、不法滞在など保護者の事情で学校教育を受けられない子どもたちが多数いると指摘する（木村, 2015）。日本の公立中学校、高等学校に在籍する外国につながる生徒に対して研究をおこなっている岡村は外国につながる子どもの経験する困難について①情報やサポートの不足②日本人の友だちとの関係③学校や教師への不信感④日本の学校内において同化することを求められているように感じる⑤周囲の日本人の異文化への理解不足⑥日本の部活動の文化への困惑という重要な指摘をしている（岡村, 2013）。岡村の研究は公立中学校、高等学校に在籍する生徒が対象であるが小学校に通う外国人児童であっても共通する部分はいくつかあると考えられよう。14 歳で中国から日本に渡った女性のライフストーリーを分析した豊田・相良（2016）では、誕生から 14 歳までの間の自己の人生について「親や家族の選択に付随するもの」と位置づけ学齢期に日本に移住した径路を描いている。小学校中学年で台湾から日本に渡った台湾人女性を対象にした市川の研究では、外国人散在地域にある日本の小学校で担任教師に恵まれたものの日本人のクラスメイトからはいじめられ学年相当の日本語能力が育たずにつらい思いをした事例（市川, 2017）も報告されている。豊田・相良（2016）や市川（2017）の事例ではいずれも大学への不本意入学を経験しており、外国人児童生徒が日本の学校において学業面で苦労している姿を確認できる。本研究ではこれまでの研究に学びながら、外国人児童の小学校での経験に着目することで 1 人の外国人児童が学級参加に至るまでの過程に影響を与えている力を明らかにできるのではないかと考えた。

Ⅱ．調査概要

201X 年 10 月から 201Y 年 3 月まで日本国内の公立 H 小学校にて日本語指導が必要な児童に対する支援者という立場でかかわりデータを取得した。

Ⅲ．研究方法

1．調査協力者と筆者との関係

調査協力者は、来日して１年に満たない中国の東北部出身の児童Ｚ（以下Ｚさん）であり、Ｚさんの性別は女性。筆者はＺさんが在籍する学級の支援者の１人である。

2．データ収集

研究に着手するにあたりＨ小学校の教員から許可をえた。なお、本研究は倫理的配慮のもとに実施され、結果に影響の出ない範囲でプライバシー保護を行っている。データの収集は、支援の際に気づいたことやＨ小学校の先生たちとのやり取りに基づき作成されている。

3．分析方法

観察記録をもとに逐語記録を作成し、KJ 法の手順を用いてラベルを抽出した。その後、複線径路等至性アプローチ（Trajectory Equifinality Approach:以下 TEA）の概念である EFP、P-EFP、BFP、OPP、SG、SD、SPO を用いて分析し図示化した。結果の真正性確保のために心理学を専門とする教育関係者一名に確認を依頼し、時期区分や図の描き方について指摘をうけ修正した。その後、公立Ｈ小学校でＺさんへ教育経験のある小学校教師一名に図の確認を依頼し児童の心性や学校という文脈を題材にした際に適切な表現について指摘を得た後、これらを修正した。

本研究の分析方法は、ヤーン・ヴァルシナー（Jaan Valsiner）の提唱する文化心理学の方法論に由来する TEA である。TEA は「人間の経験」を重視する方法論であり、安田によれば非可逆的な時間のなかで生きる人の行動や選択の径路は複数存在し、歴史的・文化的・社会的に埋め込まれた時間の制約により等しく辿りつくポイントがあるという。それを等至点（Equifinality Point:EFP）とよぶ（安田,2012）。両極化した等至点（Polarized Equifinality Point:P-EFP）（佐藤,2012）は、EFP の対極にある点である。径路が発生・分岐するポイントは、分岐点（Bifurcation Point:BFP）であり、BFP から枝分かれする径路は後戻りできない時間経過のなかで生じる（安田,2012）。必須通過点（Obligatory Passage Point:OPP）は、地政学的な概念であり、ある地点から他の地点に移動するまでにほぼ必然的に通らなければいけない地点である（サトウ,2017）。

TEA において BFP と OPP を浮き彫りにする概念に社会的助勢（Social Guidance:SG）と社会的方向づけ（Social Direction：SD）がある。SG は EFP への歩みを後押しする力であり、SD は EFP へ向かうのを阻害する力である（安田,2015）。統合された個人的志向性（Synthesized Personal Orientation：SPO）は、人が非可逆的時間を生きるなかでの「個

人の内的志向性」（弦間,2012）である。

荒川・安田・サトウらによると、研究で TEA を採用するには、1・4・9 の法則に基づいて考えることが望ましい。1 人を対象にした場合「個人の経験の深みを探ることができる」4±1 人を対象にした場合、「経験の多様性を描くことができる」9±2 人を対象にした場合、「径路の類型を把握することができる」という（荒川・安田・サトウ,2012）。本研究では、Z さんに着目することで外国人児童の経験の深みを探ることを可能にすると考えた。

Ⅳ．結果

本研究の論述及び図示化に際しては 1 人の事例を分析する研究をおこなった佐藤(2012)の研究を参考にまとめた。Z さんが実際に辿った径路は――▶で理論的に仮定できる径路は----▶で表した。本文中の＜　＞はカテゴリーである。その他の TEA の概念については図 1 に示した。Z さんに対する観察記録と教師とのやり取りから TEM 図(図 2)を作成した。Z さんの成長の過程を五つに区分し、それぞれ「誕生から両親の来日」までを第Ⅰ期、「来日から公立 G 小学校」までを第Ⅱ期、「H 小学校での初期」を第Ⅲ期、「H 小学校での中期」を第Ⅳ期、「H 小学校での変容期」を第Ⅴ期とし、Z さんの学級参加の径路を分析した。さらに、前述した TEA の概念に基づき Z さんが学級参加するうえで影響を及ぼした様々な要因を、EFP、P-EFP、SG、SD、BFP、OPP、SPO で描いた。

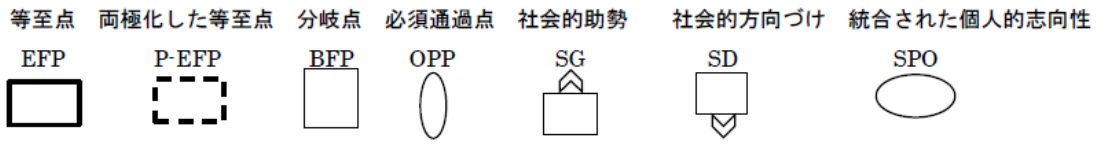

図 1 TEM 図における TEA 概念

第Ⅰ期（誕生から両親の来日）

2000 年代に＜中国の東北部で漢族と少数民族の両親の元に誕生＞した Z さんは、祖父母たちから＜綺麗な字を書くように厳しく躾られる＞。Z さんが生まれた当時は出入国管理及び難民認定法が改正された影響で＜連鎖移民の増加＞が顕著であり中国では日本を目指す人々も多かった。＜厳しい祖父母の躾＞もあり成績優秀な子どもとして成長する。こうした時代背景のなかで＜両親が先に来日祖父母に育てられる＞。

第Ⅱ期（来日から公立 G 小学校）

しばらくして＜家族で暮らす基盤が整う＞と両親に呼ばれ＜来日＞＜両親との生活が再開＞した。最初に住んだ地域は日本語の指導が受けられる学校が近くになかった。＜G 小学校転入（小学 5 年秋）＞後は、＜G 小学校で日本語指導が受けられない日々を過ごす＞。この頃から＜故郷の友人との SNS での交流（中国語）＞が Z さんの心の支えとなった。

第Ⅲ期（H 小学校での初期）

＜日本に精通した日本在住の親戚の助言＞を得て日常的に日本語指導が受けられる＜H

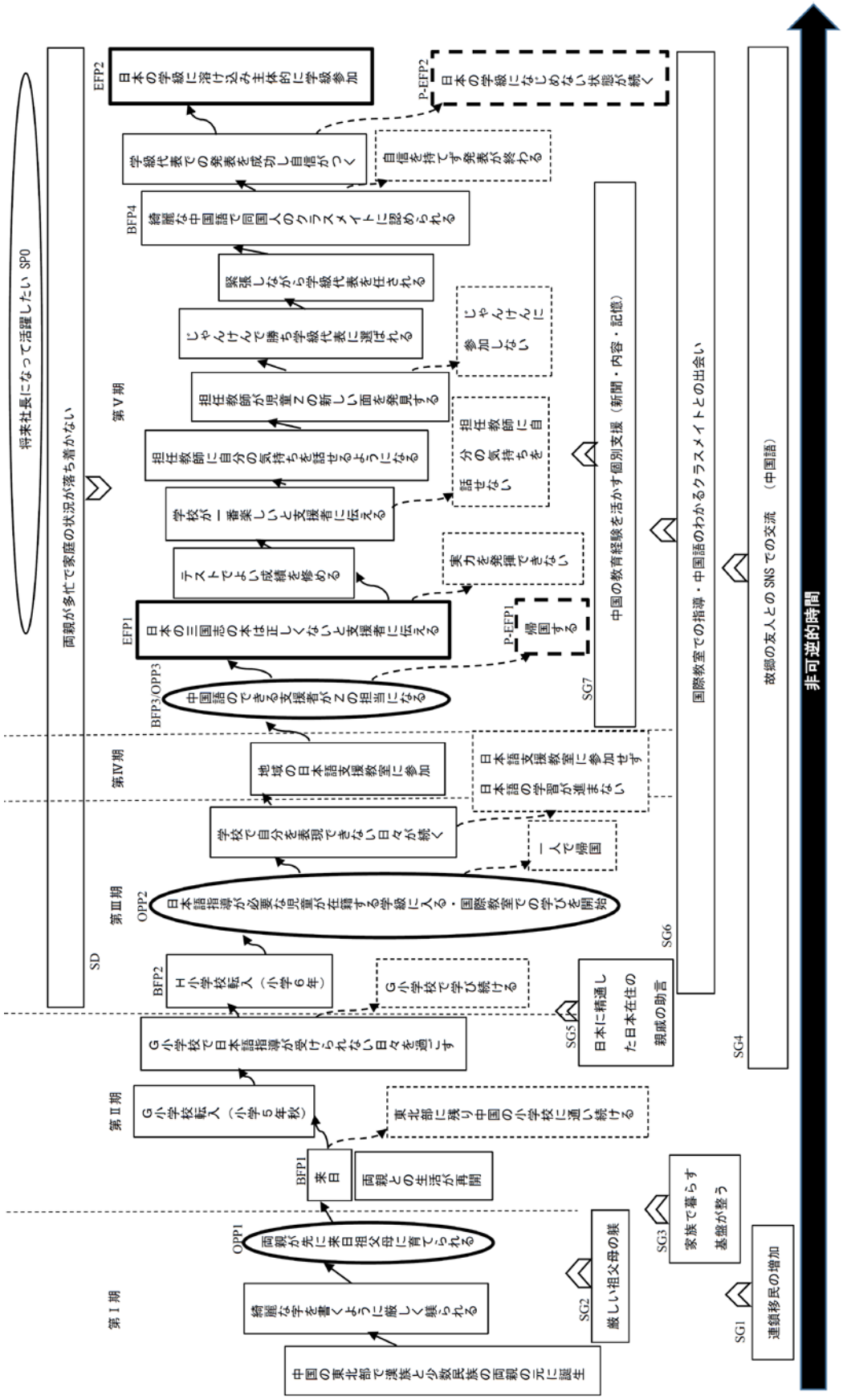

図 2 小学校高学年で来日した外国人児童の学級参加の径路

小学校転入（小学６年）＞した。転入と同時に、＜日本語指導が必要な児童が在籍する学級に入る・国際教室での学びを開始＞した。H 小学校は若手の教師から管理職まで学校全体が外国人児童の教育に情熱をもつ環境だった。H 小学校に入学すると＜国際教室での指導・中国語のわかるクラスメイトとの出会い＞があり、一言も言葉を発せずに一日が終わることはなかった。一方で、Z さんは来日間もない時期に G 小学校で日本語の指導や教科学習の助けとなるような支援を受けられずにしばらく過ごしていたため、＜学校で自分を表現できない日々が続く＞。

第Ⅳ期（H 小学校での中期）

＜地域の日本語支援教室に参加＞した際は、Z さんと同じような境遇におかれている外国人児童たちとともに専門的な知識のある支援者から考える力を養う支援を受けた。

第Ⅴ期（H 小学校での変容期）

ある日 H 小学校の依頼で＜中国語のできる支援者が Z の担当になる＞。入り込み授業の傍らで中国語と日本語を使い＜日本の三国志の本は正しくないと支援者に伝える＞場面があった。この日から Z さんに対して＜中国の教育経験を活かす個別支援（新聞・内容・記憶）＞が始まる。一カ月もたたないうちに＜テストでよい成績を修める＞。Z さんの両親は仕事で忙しい日々を送っていた。ある日＜学校が一番楽しいと支援者に伝える＞。転校当初は自ら進んで担任教師に意見を言うことはなかったが、少しずつ＜担任教師に自分の気持ちを話せるようになる＞。こうしたやり取りを続けるうちに＜担任教師が児童 Z の新しい面を発見する＞。冬になり学校行事の代表を決める場面では Z さんが自ら行動し＜じゃんけんで勝ち学級代表に選ばれる＞。勝つと思わなかったので＜緊張しながら学級代表を任される＞。学校行事の準備をしている過程では、＜綺麗な中国語で同国人のクラスメイトに認められる＞場面もあった。無事に＜学級代表での発表を成功し自信がつく＞と教室での振る舞いも変化した。声も大きくなり授業中担任教師の冗談に笑う場面も増えていった。中国語を使った支援の場面で中国社会の発展や中国人女性が社長として活躍していることを知ると、目を輝かせ＜将来社長になって活躍したい＞という思いを支援者や教師に打ち明けるようになり卒業式を前に＜日本の学級に溶け込み主体的に学級参加＞に辿り着いた。

Ⅴ．考察

ここから、OPP、SG および SD に着目して考察する。これらの三つの概念に注目する理由は外国人児童が国境や異なる社会言語環境を越える際に歴史的・文化的・社会的に制約のある時間を生きていく過程で働く力を可視化することは、外国人児童の教育や支援にかかわる人々に有意義な知見を示せると考えたためである。サトウによると、OPP は、「制度的必須通過点」「慣習的必須通過点」「結果的必須通過点」の三つに分類できる。制度的必須通過点は、義務教育のように法律で定められているような行為・経験である。慣習的必須

通過点は、化粧のように慣習的に行われる行為・経験である。結果的必須通過点は戦争中の疎開など結果的に多くの人が行う行為・経験である（サトウ,2017）。Z さんの事例では慣習的必須通過点に＜両親が先に来日祖父母に育てられる＞OPP1 が該当し、こうした径路は同じ中国人女性を対象にした（豊田・相良,2016）の事例でも描かれており現代で中国から日本に移住する家庭の子どもたちの多くが経験すると考えられる。＜日本語指導が必要な児童が在籍する学級に入る・国際教室での学びを開始＞OPP2 及び＜中国語のできる支援者が Z の担当になる＞OPP3 は制度的必須通過点の一例として位置づけられるだろう。

SG では、社会状況に関する SG1、家庭教育に関する SG2、家庭状況に関する SG3、友人とのつながりに関する SG4、身内からの情報支援に関する SG5、専門的な指導や同じ環境の仲間との出会いに関する SG6、学校での個別支援に関する SG7 が捉えられた。奥山は、外国人児童が困難を乗り越える際に必要な要因について①理解ある親②身近な日本人の親しい友だち③進学について情報をもつ担任教師等の支援であり、文章読解や作文については教師の指導が期待されると述べている（奥山,2018）。Z さんの事例では両親が多忙で家庭が落ち着かない状況のなかで H 小学校での日本語指導だけでなく中国の教育経験を活かせるような個別支援を受けられたことが困難を乗り越えることにつながったと考えられる。他方、SD では＜両親が多忙で家庭の状況が落ち着かない＞が捉えられた。Z さんは体調がすぐれない日でも「学校が一番楽しい」と語り H 小学校に登校して授業や支援を受けようとした。「感情を表出する」場の重要性は（岡村,2013）も指摘しており H 小学校はその機能を果たしていたのだろう。外国人児童の保護者からは「日本の学校は親がやらなくてはいけないことが多く負担が大きい」という声を聞くことがある。外国人児童の親が日本語を十分にできない場合「日本の保護者のように児童についてその日のうちに伝えられないことがもどかしい」と話してくれた教師もいた。日本の学校で学ぶ外国人児童生徒たちが増加する今日において現場の教師と保護者たちをつなぐシステム作りも急務である。

おわりに

Z さんの事例は日本の小学校に中途編入した外国人児童の一つの事例として位置付けられる。外国人の子どもたちが日本で暮らすようになった背景には、家庭の都合だけでなく迫害や戦火などから逃れてくるケースも少なくない。日本国は不法滞在の家庭の子どもたちも含めて「子どもの教育」をどのように進めていくのかを再考する時が来ている。

注

1）日本語指導が必要な外国籍の児童生徒の母語別在籍状況は、ポルトガル語がもっとも多く、次いで中国語、フィリピノ語である。一方、日本語指導が必要な日本国籍の児童生徒の言語別在籍状況は、フィリピノ語、中国語、日本語の順である（文部科学省,2017）。

This work was supported by the Core University Program for Korean Studies through the Ministry of Education of the Republic of Korea and Korean Studies Promotion Service of the Academy of Korean Studies （AKS-2016-OLU-2250001）.

参考文献

荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ（2012)、「複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例」『立命館人間科学研究』、25、95-107 頁。

市川章子（2017)、「台湾人アイデンティティ再考－複線径路等至性モデリングを用いて－」『対人援助学研究』vol.6、75-88 頁。

岡村佳代（2013)、「第 5 章 外国につながる子どもたちの困難・サポート・対処行動からみる現状」(加賀美常美代（編)『多文化共生論 多様性理解のためのヒントとレッスン』明石書店)、101－123 頁。

奥山和子（2018)、「キャリア形成を見据えた外国人児童生徒教育の必要性－TEM分析を使って－」『大学教育研究』第 26 号、9－26 頁。

木村元（2015)、『学校の戦後史』162-164 頁、岩波書店。

弦間亮（2012)、「3-2 大学生がカウンセリングルームに行けない理由・行く契機」(安田裕子・サトウタツヤ（編)『TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開』誠信書房)、125-137 頁。

佐藤紀代子（2012)、「1-1 DV 被害者支援としての自己形成」(安田裕子・サトウタツヤ（編)『TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開』誠信書房)、55-71 頁。

サトウタツヤ (2017)、「第 5 章 TEA は文化をどのようにあつかうか－必須通過点との関連で」(安田裕子・サトウタツヤ（編)『TEM でひろがる社会実装－ライフの充実を支援する』誠信書房)、208-219 頁。

豊田香・相良好美（2016)、「複線径路等至性アプローチ（TEA）の生涯学習研究への適用可能性」(日本社会教育学会年報編集委員会 委員長 松田武雄（編)『〈日本の社会教育第 60 集〉社会教育研究における方法論』東洋館出版社)、174-186 頁。

文部科学省（2010）日本語指導が必要な外国人児童生徒の受入れ状況等に関する調査-用語の解説（初等中等教育局国際教育課）登録：平成 22 年 04 月
http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa01/nihongo/yougo/1266526.htm (2018/11/9)

文部科学省（2017）「日本語指導が必要な児童生徒の受入状況等に関する調査(平成28年度)」の結果について（平成29年6月13日）http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/29/06/1386753.htm (2018/11/9)

安田裕子（2012)、「第 1 節 これだけは理解しよう、超基礎概念」(安田裕子・サトウタツヤ（編)『TEM でわかる人生の径路－質的研究の新展開』誠信書房)、2-3 頁。

安田裕子（2015)、「2-2 分岐点と必須通過点 諸力（SD と SG）のせめぎあい」(安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ（編)『TEA 理論編―複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社)、35-40 頁。

The Route of a Foreign Child Having Joined The Higher-grade Class in Japanese Elementary School: The Case Study of Moving to the Elementary School Having an International Class

ICHIKAWA, Akiko

Abstract

This paper delineates the route of a foreign child having joined the Higher-grade Class in a Japanese Elementary school after the amendment of the Immigration Control and Refugee Recognition Act. The author employed the research method called Trajectory Equifinality Approach (TEA). TEA derives from Jaan Valsiner's cultural psychological ideas. Also, this approach enables one to depict human experience including the idea of time. This research visualized the process of a foreign child's joining a class at a Japanese public elementary school, employing the concepts of TEM which are: EFP, P-EFP, BFP, OPP, SG, SD, and SPO. In order to collect data, the author conducted a field study at a Japanese public elementary school for half a year. During this field study, she has supported foreign children as a helper and took notes about a participant (a foreign child), the contents of the Japanese-language supports for the subject and the interaction with instructors. The result of this research showed that the participating of not only Japanese-speaking supporters but also helpers who can speak Chinese helped the subject to speak Chinese at a Japanese school, coexist Chines and Japanese culture in the participant's mind and deepen mutual understanding with teachers. Based on these results, the author would like to mention that through these processes, the subjects became able to get used to Japanese school culture and join class actively. In addition, the author considers that this study has shown one model of what the foreign children having joined a Japanese Elementary school experience. Not only this, the author believes that this study offers the data that one can see various aspects of the difficulties foreign children who take a part in a Japanese schools face and how to solve their problems.

The author would like to study the case of other foreign student (not the participant for this study) in the future. This is because she strongly desires that by researching this area, she would like to contribute to creating the circumstance where foreign children can participate in class at a Japanese school.

Keywords： Foreign Child, TEA, International Class